

Report on archaeological researches in Korea on my sabbatical year 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24318

韓国考古学調査報告 I

佐川 正敏

はじめに

筆者は2011年度東北学院大学在外研修制度により、2011年9月1日から2012年8月31日まで大韓民国(以下、韓国)全羅南道の光州広域市(以下、光州市)に所在する朝鮮大学校人文科学大学(大学はカレッジで日本の学部相当)史学科で研究中である。本専攻の院生の中には、佐川先生は転勤したと思っている方もいるようだが、そうではない。1年前に発生した東日本大震災の復旧、復興活動に関わることなく仙台を去るのは、じつに後ろ髪を引かれる思いである。しかし、近いようで遠い光州市に身を置きながら広い視野で震災を省察し、韓国人に説明することも、今後の復興活動にとって必要なことであろうと考える。

朝鮮大学校は1946年の創立で、医、歯(ともに付属病院あり)、自然科学、工科、体育、教育、芸術、法科、経営、国際関係などの大学と約3万人の学生を抱える、全羅道の私立大の雄である。とくに宗教とは関連がない。本館(図1の屋根が三角形の建物)に人文科学大学と外国語大学が所在するのは、創設の歴史を示している。筆者は現在、朝鮮大学校から研究教授と

いう身分を与えられているが、人文科学大学として海外の教授を受け入れたのは、筆者がはじめてだそうであり、大変名誉なことである。

今回の研修の目的は、①前期旧石器(韓国では中期)を中心とする旧石器の研究と、②百済を中心とする官衙と寺院、瓦の研究である。筆者がなぜ光州市に身を置いているかという、①については、朝鮮大学校の史学科には、韓国旧石器研究の中堅である李起吉教授がおられ、20年間にわたって全羅南・北道で複数の文化層をもつ旧石器時代遺跡(竹内里、月坪、道山など)の発掘調査と研究を行い、すばらしい成果をあげているからである(佐川2011a)。②については、国立扶餘文化財研究所が全羅北道の益山市にある王宮里遺跡と帝釈



図1 朝鮮大学校キャンパスの冬の夜景(同大カレンダーより)

寺跡で、百濟武王段階の都城と寺院の問題について、光州市の西に隣接する羅州市にある国立羅州文化財研究所が伏岩里遺跡で、在地の中心的な豪族が百濟の地方勢力として組み込まれる過程について、それぞれの発掘調査を通して解明しようとしているからである。

つぎに、この全羅南・北道（湖南）が朝鮮半島（韓国では韓半島）の南西部に位置し、地理的にも歴史的にも九州を通して日本列島と密接な繋がりがある。一方で目を西に向ければ、黄海や東シナ海を通して中国の華北・華中地方と密接な繋がりがある。先の①と②の主目的について、韓国の地方に身を置きながら名実ともに東アジア的視点で思考してみると、仙台から西方を遠望するのと、当然違った見え方がするであろうと期待される。

さらに、光州市は本学の所在地・仙台市の姉妹都市であり、2012年は締結10周年にあたる。両市が姉妹都市に至った経緯を知らないが、おそらく都市や人口（光州は140万人）の規模が似ているからであろう。また、半島を南北逆にし、済州島（済州自治道）を北海道に見立てると、全羅南・北道は東北地方の太平洋側に近い位置関係になろう。しかし、両市の交流については、歴史や文化財に関するものがほとんどなく、仙台市博物館で国立光州博物館や光州市民俗博物館の所蔵品による特別展を行ったことはない。ところが、たとえば本専攻の辻秀人氏の専門分野である古墳時代においては、仙台市周辺は古墳時代の前方後円墳の分布のほぼ東端であり、光州市は分布のほぼ西端にあたる（辻2007）。また、この地域独特の墓制や百濟的な墓制、中国的な墓制も認めることができる（金洛中2009、同2011）。まさに東アジア的視点に

立つならば、仙台市周辺と光州周辺を比較しながら、半島と中国世界との関係をも展望することが可能なのである。筆者は、いろいろな切り口で仙台市周辺と光州市周辺を比較した歴史や文化の学術研究と交流が可能であると考えており、今後それを具体的に推進したいと模索しているところである。

さて、朝鮮大学校での研修が半年を終え、折り返し地点に到達したので、筆者がこの半年間に見聞した韓国考古学界の印象深いできごと（1. 旧石器の調査、2. 韓国文化財庁創立50周年記念関連シンポジウム、3. 韓国瓦学会の活発な研究活動、4. 朝鮮王朝文化と中国、そして日本）について、新鮮な記憶が薄れないうちに報告しておきたい。

1. 旧石器の調査

筆者は現在、大学で2つの居所を与えられている。それは本館にある研究室と博物館である。毎週月～金曜日（韓国の学校は週休2日）の9時半から17時まで朝鮮大学校博物館（館長は李起吉氏）で旧石器を調査をするというのが、日常生活の一番の基本となっている（図2）。半年間に全羅南道の南端の順天市に所在する竹内里遺跡（李起吉ほか2000）と、月坪遺跡の



図2 朝鮮大学校博物館で旧石器を観察する筆者

中間文化層(李起吉ほか 2009)の旧石器を1点、1点、剥離面の1面に至るまで観察させていただいた。竹内里遺跡の観察結果については、2012年1月12日に朝鮮大学校でトピック的に発表した。ここではその概略を報告する。

(1) 大型重量石器の変遷

竹内里遺跡では旧石器時代の文化層が4枚(下から第1文化層が前期(韓国の中期)、第2、3文化層が前期(韓国の中期)~後期初頭、第4文化層が後期)、月坪遺跡では同文化層が5枚(下から第1、2文化層、中間文化層、第3、4文化層:李起吉氏はすべて後期と考える)あり、約6万年前以降の半島南西部の旧石器の変遷を考える重要な遺跡となっている。筆者が研修後半に調査を予定している道山遺跡も、同様に多文化層遺跡である。李起吉氏のように後期旧石器も含む多文化層遺跡を多く調査した研究者は、じつは韓国では非常に少ない。筆者が最後の力を振り絞って日々観察している前期旧石器を構成する大型重量石器(ハンドアックス、クリーバー、多面体・球形石器など)と小型剥片石器(スクレイパー、ノッチ、鋸歯縁石器、錐状石器など)が、後期旧石器時代へ移行する過程でどのように変遷するかをこの目でしっかりと確認することは、今回の研究の主目的の1つである。

大型重量石器が後期旧石器時代になっても明確に存在することを、今回認識した。ハンドアックスは小型化し、量的にも僅少で、クリーバーはすでに消滅している可能性がある。また多面体・球形石器は、その加工技術も大きく変化することなく、全体に小さな鈍角剥離を交互に繰り返した結果、幾筋もの稜線を残す特徴をもつ

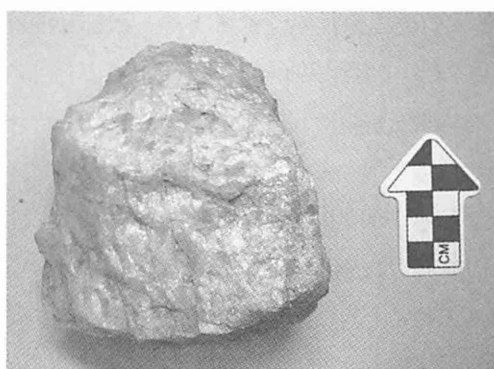


図3 竹内里遺跡第4文化層の多面体石器

たまま、細石刃段階に忽然と消滅した(図3)。もともと片手の手のひらに乗るくらいの大きさ(直径約12cm)の石英脈岩原石が素材であり、サイコロ状の角礫の場合にはまずその稜線を敲き潰す作業をすることが多い。これはDMZに近い漢灘・臨津江流域の資料にも認められる。また、長野県飯田市の竹佐中原遺跡の石英岩資料にも認められるので、筆者は多面体・球形石器との関連性をずっと気にしてきたが、その思いは一層強くなっている(佐川2011a)。

李氏からは、竹内里遺跡の後期旧石器に使用された石英脈岩が、前期旧石器のものと異なり乳白色で良質のものに変化している、と教えられた。その現象は、後期旧石器時代の直前か初頭の資料の可能性のある月坪遺跡中間文化層の石英脈岩製石器でも確認できた。同時に小型剥片石器のなかにエンドスクレイパーや、1つの石器にノッチの部位とサイドスクレイパーの部位が共存する石器も安定して認められるなど、竹内里遺跡第1文化層段階にはなかった特徴も認められ、興味深い。しかし、前期旧石器の中には彫刻刀形石器は見あたらない。

(2) 竹内里遺跡のライオライトと石刃技術、そして剥片尖頭器

竹内里遺跡の旧石器第4文化層では、石刃技術の段階を示すようにライオライト（韓国でいう流紋岩）が使用され始める。石刃は失敗品ばかりが残され、石刃核もないので、多くの石刃は石刃核とともに、つぎのキャンプ地に搬出されたと推定される。筆者は、李氏に剥離された石刃の使用目的について質問すると、剥片尖頭器本体は未発見であるが、剥片尖頭器の基部と思われるものがあるので、剥片尖頭器の製作を推定しているとのことであった。剥片尖頭器とは、木製の柄に装着するために基部を舌状に作出したナイフ形石器類似の石器で、用途のメインは狩猟具である槍の可能性が高い（図4：李起吉ほか2009）。

竹内里遺跡からは石英脈岩製の不定形剥片から製作されたスクレイパーやノッチ、次述する楔形石器など各種のツール（道具としての石器）が多く出土しているので、石刃剥離作業以外の生活に関わる作業も行われていた。しかし、そのツールの製作にライオライトがほとんど使用されていないのは、おそらく石刃剥離に欠かせないライオライトが乏しかったので、遺跡

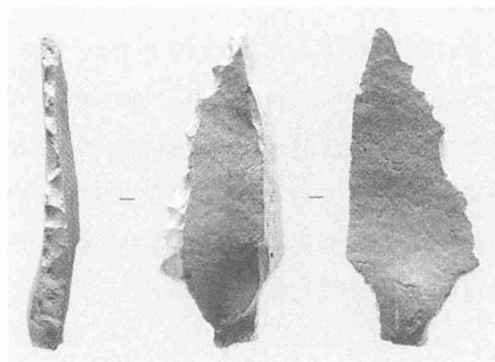


図4 月坪遺跡第3文化層の剥片尖頭器

の横を流れる黄田川で採取できる石英脈岩を使用したと推定される。つまり、最重要生業であった狩猟の最重要道具の剥片尖頭器の製作に際しては、携帯と二次加工、新品との交換の容易な石刃との結びつきが絶対的なシステムとなっており、半島南西部の全羅道においてはライオライトがもっとも石刃技術に適した石材であった。しかし、ライオライトはどこにでも転がっている石材ではないので、その原産地と獲得戦略は、細石刃技術の段階も含めて後期旧石器時代人の重要課題となっていたはずである。

(3) 後期旧石器時代の楔形石器

竹内里遺跡の旧石器第4文化層には、楔形石器がある（図5）。石材はライオライト製と石英脈岩製がある。楔形石器は日本の後期旧石器時代や縄文時代に普遍的に認められる石器で、

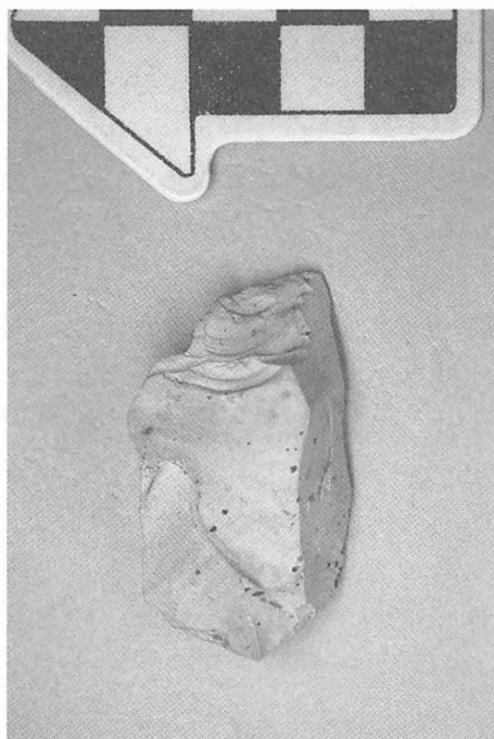


図5 竹内里遺跡第4文化層の楔形石器

ピース・エスキューとも称される。剥片を台石の上に置いて、石製ハンマーを使って両極打法で敲きながら製作された、上下辺に薄い刃部をもつ短冊形の石器である。製作時に複数の両極剥片も排出されるし、未完成の場合は両極石核のように見える。楔形石器は、骨などを分割する時に使用されるが、この時にハンマーの力と対象物からの反作用で楔形石器から細かな剥片が排出され、なかには両極剥片もあり、数カ所に製作時か使用時に使用された石製ハンマーと台石も残されていた。報告書中にも、両極打法と両極石核、両極剥片についての説明はある。

しかし、李起吉氏と竹内里遺跡の楔形石器について意見交換をしていて、韓国ではこの石器がどうやら認知されていないことを知った。韓国に来る直前に八戸市田向冷水遺跡の後期旧石器時代の楔形石器と石製ハンマー、台石の写真をたくさん撮影し、韓国で紹介しようと準備していたので、その映像を示しながら李氏と再度意見交換をした。田向冷水遺跡の石刃や剥片尖頭器に類似したナイフ形石器を紹介したこともあって、李氏は両極打法と楔形石器の問題に非常に興味を示され、ぜひ共同で研究を深めようということになった。

両極打法は北京原人も使用したことで有名であり、中国泥河湾盆地の小長梁遺跡にも存在するので、その使用は100数十万年前に遡る。しかし、筆者が知る中国最古の楔形石器は、約4万年前の山西省峙峪遺跡の事例である（かつて中国では楔形細石刃核の起源とされた）。韓国でも楔形石器は、竹内里遺跡や月坪遺跡の前期旧石器にはみられないので、後期旧石器時代から誕生した石器である可能性が高い。今後半年間で類例を収集したい。

2. 韓国文化財庁 50 周年記念関連シンポジウム

2011 年は、韓国文化財庁（文化財管理局が前身）創立 50 周年にあたったので、9 月から各地で中央（大田）と地方の国立文化財研究所主催のシンポジウムが開催された。筆者はその多くに出席し、韓国の考古学者が国家として、地域として、どのような問題に関心をもち、どのような方法で研究を展開しているかを直接知るよい機会となった。また、旧知の考古学者と再会し、あるいは新たな友人を作り、懇親を深める絶好の機会でもあった。

(1) 高麗首都開城と東アジアの都城文化

韓国国立文化財研究所考古研究室（崔孟植室長）は、一連のシンポジウムのスタートを切って 2011 年 9 月 27 日に国際シンポジウム『高麗首都開城と東アジアの都城文化』をソウルにある国立古宮博物館第二講堂で開催した。韓国のシンポジウムでは、個別の発表者の発表旨とそれに対するコメンテーターのコメント（質問を含む）が要旨集としてきれいに印刷されて、当日配布される。基調講演と個別の発表者の発表の後に、総合討論が行われ、コメンテーターがコメントしながらそれに発表者が回答し、司会者が総括するという形式をとるのが一般的である。今回のシンポジウムは同時通訳装置が用意され、プロによる舌を巻くような流暢な通訳であった。

さて、北朝鮮の南端にある開城は、韓国が支援してできた工業団地で有名であり、高麗の首都があったところでもある。韓国国立文化財研究所は、北朝鮮とともに 2007 年から 5 年計画

で開城跡の試掘調査を行った。その経過がたくさんさんのスライドによって紹介された。2010年に潜水艦撃沈事件と大坪島砲撃事件が勃発し、両者の関係が冷却化したことによって、最終年度である2011年の試掘調査は中止された。最後の発表者である李相俊氏（国立扶餘文化財研究所所長：韓国国立文化財研究所考古研究室在任中に本プロジェクトの中心メンバー）が、その無念さと今後の展望を切々と語ったことは非常に印象深かった。

日本からは橋本義則氏（山口大学）が日本最後の都城である平安京について、小野正敏氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）が平泉遺跡群や鎌倉時代の都市遺跡について発表をした。中国からは秦大樹氏（北京大学）が北宋開封遺跡と南宋臨安府遺跡について、本専攻客員教授も務められた董新林氏（中国社会科学院考古研究所）が高麗と関係の深かった遼の上京遺跡などについて、魏堅氏（中国人民大学）が元上都遺跡についてそれぞれ発表した。

たくさんさんの発表とコメントを一日のシンポジウムで行うのが精一杯だが、できることならさらに踏み込んで比較検討する時間も必要ではないかと思う。今回のシンポジウムでは、とくに中国都城との比較について時間を割いてほしかった。筆者が興味深く感じたのは、開城が小盆地を選択して造営された点である（図6：禹誠勲2011）。つまり、高麗時代になっても朝鮮半島独特の自然の山の稜線や山城による防衛戦略が、依然として存続していたということである。結果として自然地形の影響を受け、宮城は南に傾斜した地形に階段状に造営され、羅城も建物や道路を整然とした碁盤の目状に配置することが困難になる。平坦地に都城を造営し、

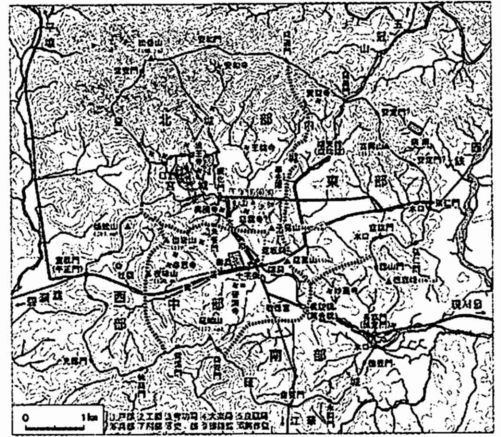


図6 高麗時代開城内施設位置図

それを城壁で囲む方式は、朝鮮時代になって中央（漢城：現ソウル）でも地方の邑城でもようやく採用されたのである。

最後に、韓国側が開城跡の発掘調査に執着ともいえる強い関心を寄せるのはなぜか、という点について筆者の考えを述べておく。古代の百済の首都であるソウル（風納土城跡）、公州、扶餘（官北里遺跡）、益山（王宮里遺跡：武王段階の首都か）そして新羅の首都慶州では、韓国国立文化財研究所や韓神大学校、公州大学、国立扶餘文化財研究所、国立慶州文化財研究所が発掘調査を行っている。しかし、古代韓国の首都の中核であった宮城跡はどれひとつとして明らかにされていないのである。風納土城跡や官北里遺跡、王宮里遺跡では、大型堅穴住居跡や大型掘立柱建物跡が若干発見されている程度で、今のところ基壇も礎石も保存されておらず、宮城の実態が把握できないでいる。これに対して開城の宮城跡は、基壇や礎石などの保存がきわめて良好なのである。韓国側のそうした歯がゆい思いに、開城跡は一筋の光を差し、古代韓国の首都宮城の復原のための重大な参考資料となっているのである。

(2) 東アジアの古代庭園と寺院跡の研究現状と課題

2011年10月5日に国立扶餘文化財研究所が主催し、扶餘ロッテホテルで開催されたシンポジウムである。21世紀に入り、同研究所は軍守里廢寺跡、王興寺跡、定林寺跡、帝釈寺跡の4つの百濟寺院跡の発掘調査を行った(佐川2010)。軍守里廢寺跡は植民地時代以来の発掘調査であり、当時見逃していた木塔の地下式心礎導入用斜道を検出した。王興寺跡ははじめての発掘調査であり、木塔地下式心礎舍利孔から577年の紀年銘が刻まれた舍利容器や、寺院への出入斜道が発見された。定林寺跡は植民地時代と忠南大学による発掘調査が行われたが、高麗時代の伽藍との区別が明確化した。帝釈寺跡は益山・王宮里遺跡の東方にあり、木塔が地上式心礎であること、木塔基壇が版築須弥壇を有する特異な形式であること、『観世音応驗記』に記述された639年焼亡を裏付ける焼けた瓦が発見されたこと、木塔掘込地業とほぼ同一の遺構が木塔西方から検出されるなどの成果があった。そして、陵山里廢寺跡も含めて百濟寺院の伽藍配置が、一貫して一塔一金堂式であったことが明確となった。また、王宮里遺跡の寺院跡東方からは2007年に小型の庭園跡(図7のA)

が発見され、続いて一段高い北側からは曲水式の庭園跡も発見され、後者は「後苑」にあたるということが具体的に解明されつつある。

以上の目まぐるしい大発見を受けて、今回のシンポジウムは開催された。慶州の成果を含む韓国側の発表とともに、日本からは箱崎和久氏と高橋千奈津氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所:以下、奈文研)、中国からは何利群氏(中国社会科学院考古研究所)と呉桂兵氏(南京大学)が、それぞれ古代の寺院跡と庭園跡について報告した。

筆者は上記の発見を幸いにもすべて見学させていただいたし、本専攻の教員と院生もそのいくつかを見学する機会があった。ここではシンポジウムにおいてあまり議論されなかった2つの点について、感想を述べておく。1つは東アジアにおける伽藍配置の問題である。百濟寺院が少なくとも泗泚期において一貫して一塔一金堂式(日本では四天王寺式)であったのだが、これは7世紀前半までの中国の伽藍配置の状況を反映していると推定される。新羅(三国時代)寺院の状況はなぜか十分明らかではないが、創建皇龍寺は一塔一金堂式の可能性が高い。統一新羅寺院は双塔式が中国から受容されたが、依然として一塔一金堂式は存続していた。これに対して日本の伽藍配置は一塔一金堂式を主流としながらも、とくに640年頃の百濟大寺(吉備池廢寺跡)から法隆寺式、川原寺式などの独自の伽藍配置が出現した(菱田2005)。筆者は従来、經典の意味も十分理解できない当時の日本で、独自の伽藍配置を創案することはあり得ないと考えていたが、日本創案という仮説に傾きつつある。そうしたことの是非も含めて、東アジア的に比較検討すべき課題であると考えらる。



図7 王宮里遺跡宮城段階の空間区画および活用

2つ目は王宮里遺跡で発見された推定後苑跡である。その造営年代は武王段階の7世紀初頭に遡り、統一新羅時代のある段階まで使用された。この発見は、もちろん庭園史上重要であることはいうまでもないが、古代韓国で唯一発見されている方形宮城（王宮里遺跡のこと）の実態を知る手掛かりになると考えられる（図7：田 2011）。王宮里遺跡は寺院として再利用される前には宮城として使用され、両者の南北中心軸線（1）は一致しており、それは南面石築（城壁あるいは大垣）に開く中門に重なる。ここに宮城の中核施設（宮殿中央区）が階段状に存在したことは確実である。さらに、この空間の東と西にも空間があり、推定後苑跡は東空間の北方に存在する（南北中心軸2）。問題は東空間が東側の宮殿区画（宮殿東区）であったかどうかである。そして、この問題は、7世紀初頭の未完成の隋大興城を参考にしたのか、それとも南北朝時代の並列した宮殿区画（文献から推定）をモデルにしたのか、という新たな東アジア的問題とも関わっているのである。

(3) 古代都市溟州と嶺山寺

2011年10月20日、21日に国立中原文化財研究所が主催し、東海岸の風光明媚な江陵市に所在する関東大学校で開催されたシンポジウムである。統一新羅は9世紀に禅宗を受容し、後の九山禅門の原形が形成された。日本では密教が導入された時期である。江陵市には九山の1つである嶺山寺跡があり、国立中原文化財研究所が発掘調査を開始したのを受けて行われたものである。韓国人研究者20名（考古学、文献史学、美術史学、建築史学）の発表とコメントに加えて、日本からは菱田哲郎氏（京都府立大

学）と山田隆文氏（奈良県教育委員会）が、中国からは嚴耀中氏（上海師範大学）と李錦繡氏（中国社会科学院歴史研究所）が、古代都市と寺院（こちらが主題）について発表した。20日には溟州銘軒丸瓦が発見された溟州山城を、21日には発掘調査中の嶺山寺跡を見学した。

国立中原文化財研究所所長の金聖範氏は、1997年以來の既知の間柄であり、翌年氏が奈文研と韓国国立文化財研究所との交流で奈良に滞在した時に、若干お世話をさせていただいた。このシンポジウム開催の10日ほど前に突然連絡が来て、考古学からのコメントを依頼され、条件付きで承諾した。シンポジウム前日に完成したばかりの分厚い発表要旨集に、筆者の名前も入っているのに驚いた。そのコメントの概略を記述しておく。

1つ目は韓国における古代の地方都市の研究方法についてである。韓国では百済と新羅の首都の宮城も、所在が未確認であったり、ほとんど把握されていない状況であることは、「2-(1)・(2)」ですでに述べた。したがって、古代の地方都市は山城以外はほとんど不明である。古代の国府や郡家遺跡、国分寺跡などが全国的に把握されている日本と比較するならば、意外な現象である。山田氏は今回の発表で、まず日本で用いられている地形図から遺存地割を読解する方法について紹介し、つぎに植民地時代に作成された地形図を元に遺存地割と思しき痕跡や若干の遺跡、遺構を手掛かりに、古代溟州が溟州山城だけではなく、現江陵市の地下にも埋蔵されているだろうし、ほかにも平地に都市遺跡が眠っているはずであるという発表をした。しかし、いずれも仮説ばかりで、誰もが納得する遺構をほとんど提示しなかったせいもあり、韓国

側の反応は今ひとつで、首都の慶州（金州）以外に、条坊をもつ都市はなかっただろう、と多くの研究者は考えているようである。

筆者も地方都市に条坊があった可能性が低いとみるが、山田氏が山城と平地城がセットになって地方都市を構成していたという仮説を支持したい。溟州の場合、山城は河川に面してはいるが、海岸から少し奥にあり、東海岸沿いの海上交通を考えるならば、海岸沿いの現江陵市に何らかの官衙や倉庫の存在を想定するのは自然なアイデアであると考え。筆者がそう考えるのには理由がある。国立中原文化財研究所が中核調査対象とする忠州市の塔坪里遺跡は、統一新羅の五京の推定地であり、南漢江に面し、周辺にはランドマーク的存在であった中原塔坪里七重石塔（を含む寺院）や薔薇山城、中原高句麗碑があり、三国時代の在地豪族の墓である樓岩里古墳群含む多くの古墳群が残されている。塔坪里遺跡は、三国がここで覇権を争った最大の理由である鉄の採取と鉄器の生産を効率的に行い、南漢江を通しての交通・輸送手段の至便さを有したところである。とくに地方都市の場合は、山城だけではなく、平地の官衙や工房、倉庫、港湾と一体のもととして複合的に捉える必要があろう。

所長の金聖範氏はそのこと十分認識している。氏が前任地の国立羅州文化財研究所長在任中に、中核調査対象地である羅州市の伏岩里遺跡から610年頃に百済の地方官衙が存在したことを裏付ける多くの木簡が出土したからである。官衙の存在の確認調査は現在進行中であるが、本遺跡の前方には300年以上にわたって拡張を重ねて形成されたあの伏岩里3号墳を含む伏岩里古墳群があり、後方には会津山城があり、

また交通・輸送の動脈としての榮山江も近くを流れている。これらに密着した集落跡や寺院跡（ともに未発見だが）も含めて、古代地方都市の問題を具体的に検討していくことになるだろう。

2つ目は羅末麗初の寺院の伽藍配置の問題である。日本における伽藍配置の形式の多様性と解釈、そして国家仏教のあり方の変遷については、菱田哲郎氏から発表があった。また楊正錫氏（水原大学校）は、九山関連の寺院の発掘調査に基づいてその伽藍配置について発表した。それによれば、塔はすべて石塔であり、双塔式伽藍に加えて、一塔一金堂式伽藍が多く、伝統的な伽藍配置が長期間維持されていたこと、そして山岳寺院がかなり多いという特徴があり、筆者は驚いた。また、子院のような空間も形成され始めたようである。見学した嶺山寺跡の発掘現場は、出土した瓦の年代からみて、高麗、朝鮮時代のもので、創建時のものがない。今回の発掘で確認された遺構は塀や通路などで区画された子院のような空間であって、嶺山寺の中心伽藍は、発掘現場に川をはさんで隣接する広大な平地に立つ幢竿支柱（図8）付近に存在するのではないだろうか。

筆者が暮らしている光州市は、統一新羅時代以来の重要都市で武珍州と呼ばれた。筆者が朝鮮大学校まで毎日通勤している道路沿いには、統一新羅末期創建の光州東五層石塔が立っている（図9）。地震の少ない土地柄とはいえ、歴史の荒波の中で何度か復原されたのかもしれないが、石塔しか残されていない。こうした風景は、韓国で至るところでみることができる。金堂や講堂などは木造であったので、残されていないのである。つまり、石塔の北側を発掘調査すれば、金堂を含む伽藍の遺構を発見できる潜



図8 岷山寺跡の幢竿支柱



図9 光州東五層石塔

在性をもった寺院跡が、韓国各地には山のようにあるということである。名刹だけではなく、こうした無名の地方寺院を調査、研究することは、同時に地方官衙（郡や県）の解明に繋がるのではないだろうか。

(4) 実験考古学からみた大型甕棺製作技法

本シンポジウムは2011年10月27日に国立

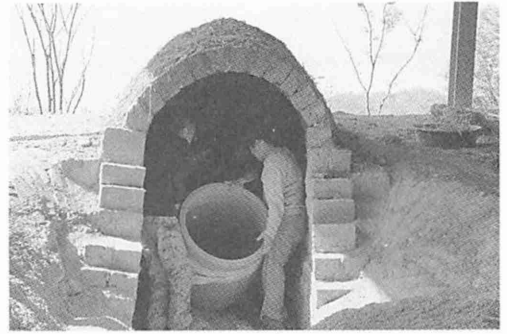


図10 大型甕棺焼成実験の窯詰め

羅州文化財研究所によって主催された。光州市の西に接する羅州市は、かつて全「羅」道の中心であり、朝鮮時代の邑城の面影を残している。前述した伏岩里古墳群や潘南古墳群などが存在し、近いうちに古墳をテーマとした羅州国立博物館が完成する予定である。古墳の葬具には超大型甕棺が使用されており、甕棺の製作技術と窯での焼成技術の復原がシンポジウムのテーマである。羅州国立文化財研究所では、研究所の裏手に窯を復原し、焼成実験も行っている（図10）。筆者も2009年に、甕棺製作窯跡の発掘現場を見学させていただいた。

全体として、甕棺の復原実験、そして窯跡に残された痕跡から復原された窯に焦点をあてた発表であった。日本から招聘された北野博司氏（東北芸術工科大学）が総合討論で述べられたとおり、甕棺本体の表面に残された痕跡を実験によって検証しながら、焼成のプロセスを復原する視点が弱かったのが、今後の大きな課題であろう。

(5) 咸安・城山山城の古代環境復原の研究

本シンポジウムは、2011年11月5日に国立加耶文化財研究所が主催し、韓国考古学会が共催して嶺南大学（韓国考古学会の開催校）で開

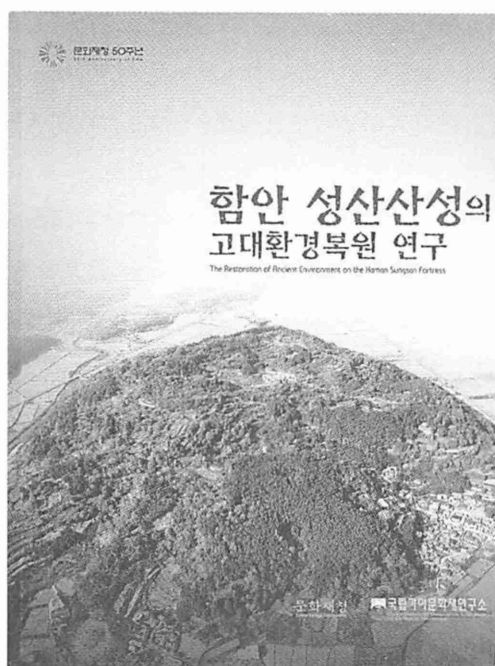


図 11 シンポジウム発表資料と城山山城

催された(図 11)。所長の金容民氏とも国立扶餘文化財研究所所長時代以来の既知の間柄であり、本専攻の大学院 GP によって 2010 年に招聘したこともある。加耶文化財研究所の中核調査対象である咸安城山山城は、貯水池から 6 世紀中葉の木簡が集中して発見されたことで韓日で非常に有名な遺跡である。木簡は、洛東江流域の物資の流通を示す超重要なものである。筆者は本専攻の熊谷公男氏と辻秀人氏とともに 2004 年に当時木簡の調査と保存に専念されていた鄭桂玉氏(現韓国国立文化財研究所美術工芸室長)をお願いをして、処理されて間もない木簡を見せていただいた。

今回は、山城での生活に不可欠な水源である貯水池に焦点を当てながら、その構築技術を地形学と土木工学から研究し、保存された樹木や花粉などの同定によって山城の自然環境を復原し、保存された動物遺存体と DNA によって食

生活や家畜飼育の問題、骨角と金属の工芸技術に関して研究した成果を考古学と総合する学際シンポジウムが企画された。地形学と土木工学の分野は公州大学校などの外部の専門家に委託したが、研究所で雇用した植物、動物考古学の若手スタッフとともに進めている韓国ではユニークなプロジェクトである。

同時開催中の韓国考古学会と連携して行われた本シンポジウムに足を運んだ研究者は意外に少なかったのは、韓国考古学の現状の一側面を物語っているのであろう。日本と同様に考古学と文献史学が連携した研究が目立つ中で、このような学際研究は今後ますます必要になるであろう。2 月上旬に金容民氏から電話があり、「1 月に人事異動があつて、羅州国立文化財研究所の所長に就任しました。」と伝えられた。せっかくの城山山城学際プロジェクトがどうなるのか心配だが、異才が羅州に異動し、今度はどんなプロジェクトを進めるのか、と筆者は内心楽しみにしている。公務員の人事異動の激しい韓国で、氏のようなスピーディーなアイデアマンでないと、所長職は務まらないであろう。

以上のほかにも文化財庁 50 周年記念シンポジウムはあつたが、それらの 1 つ 1 つが大きな学術テーマであるので、とても短文で語り尽くせるものではない。しかし筆者にとっては、韓国考古学界の大きな指針を知る絶好の機会であつた。

3. 韓国瓦学会の活発な研究活動—中国との関連性が追究できる韓国の瓦—

韓国瓦学会は近年、東アジアの視点から研究を展開している。2009 年の第 6 回定期学術大

会は、「中国の瓦」（周時代から明・清時代までの歴代の瓦）がテーマであった。2010年の第7回定期学術大会は、金有植氏（現国立中央博物館）が国立扶餘博物館で企画した特別展に合わせて「百済瓦塼と古代東アジアの文物交流」をテーマとし、日中からも研究者を招聘した国際シンポジウムであった。2011年の第8回定期学術大会は、「瓦の生産と流通」をテーマとしたが、それに先だって中国南京市博物館の王志高氏の特別講演「六朝建康城遺跡出土瓦の観察と研究」があった（韓国瓦学会2011）。また、2011年12月には韓国瓦学会として南京で六朝瓦の調査を行い、2012年も洛陽で瓦調査が予定されている。

「中国の瓦」をテーマとした時には、韓国に中国歴代瓦を研究する研究者がいるのか、と筆者は最初不思議であった。しかし、高麗時代には開城や江華島に、朝鮮時代にも漢城（景福宮や光華門など）や華城という中国的宮殿建築が存続しているのである。開城の高麗宮城跡の出土瓦についても研究が行われている。またこの10年余り、景福宮を中心に朝鮮時代の宮殿や門が国立文化財研究所によって積極的に発掘調査が実施され、建物の変遷過程も明らかにされ、整備や復原、あるいは復原のやり直しの基礎資料となっている。また、出土した瓦の研究も行われる過程で、明、清時代の瓦や釉薬瓦、窯跡についても関心が高まりつつある。日本でも近世城郭跡の発掘調査が行われているので、近世の瓦研究は若干行われているが、中国との関連性が追究できる韓国の状況とは大きく異なっており、国内研究にとどまっている。鬼面文鬼瓦や鯨（しゃちほこ）の成立を追究するだけでも、東アジアの視点から研究できるのだが、奈文研

が主導して古代東アジアの造瓦技術を研究した時期もあったが、今は若干息を潜めてしまった（『古代東アジアの造瓦技術』：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2010）。

2011年の第8回定期学術大会で特別講演を行った王志高氏も、『古代東アジアの造瓦技術』に寄稿しているので、本書を熟読されたようであり、講演要旨（特別論考）で筆者の「粘土板巻き作り南朝主流化説」について叱正いただいた。南京市内（建業、建康城）出土の瓦を見る限り、丸瓦は粘土紐巻き作りで、平瓦は後漢時代頃からすでに粘土板巻き作りであるという批判である。平瓦については高説を受け入れるが、熊津期百済から丸瓦も粘土板巻き作りが主流になったのは、500年前後に南朝で丸瓦粘土板巻き作りが主流化したことが背景にあったからであろう（佐川2011）。それが南朝末期のどの段階かは、南京市博物館や南京大学の研究者が、いずれ解明するであろう。

日中韓共同プロジェクト『古代東アジアの造瓦技術』は、各国の研究者の造瓦技術への関心を高める大きな役割を果たした、と実感した。それ以上に、韓国瓦学会は2011年から月例研究会を開催し、若手が報告する朝鮮時代までの瓦当文様、造瓦技術、窯の研究成果を、韓国の



図12 韓国瓦学会2012年1月月例研究会

瓦博士である金誠亀氏らが批評するという羨ましい進展をみせている（図12）。

4. 朝鮮王朝文化と中国、そして日本

(1) 朝鮮王朝の楽器と祭器への関心

「大長今」が大人気であった2007年のゴールデンウィークに妻とソウルを観光し、景福宮や昌徳宮などの五宮と宗廟をすべて見学した。しかし、途中から観光でなくなった。この時期は「ソウルフェスティバル」と称し、景福宮などで各種の伝統的な歌舞音楽が行われるが、最大の行事は宗廟祭礼である。宗廟には歴代の王と王妃、王族などの位牌が奉られているが、この祭礼は五穀豊穡を祈念する社稷祭礼と並んで国家二大祭礼の1つであった。宗廟祭礼を石敷きの前庭に座ってみていると、祭礼に伴って目前で演奏されている古楽器のなかに編鐘と編磬があるのに驚いた（図13：国立古宮博物館パンフレット）。この2つの古楽器は、中国新石器時代末期あるいは夏時代初期の龍山文化段階に創作された銅鈴と石磬を祖型とし、春秋戦国時代から編鐘と編磬が誕生するからである。

その後、景福宮の西にある古宮博物館へ向かい、「宮中楽器」のコーナーで編鐘と編磬（石製）をじっくりと観察した。それぞれ単体で使用する大型の鐘と石磬もあって、それが祭礼の音楽の開始と終了を告げる役割を果たすこと、編磬は古楽器の調律の要であること、高麗時代の1116年に宋から伝わったことなどをはじめて知った（国立古宮博物館2005）。確かに、三国時代や統一新羅の遺跡からこれらの遺物が出土したという事例はない。また、日本の寺院には単体の梵鐘と小型磬があるが、平城宮跡や正倉院にも事例がないし、現在の宮中音楽などにも

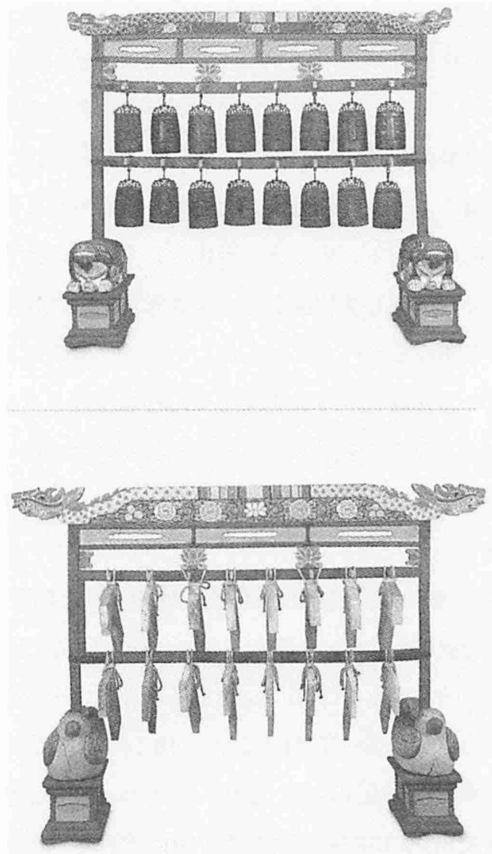


図13 朝鮮時代の編鐘と編磬

見あたらない。おそらく古代の半島も日本も、なぜか両者を受容することはなかった。礼楽の理念の出現と形成、拡散を示す銅鐘と石磬が、いまなお韓国に生きていることはじつに興味深いことであり、筆者は強い関心をもってきた。

その拡散については、高麗と宋との関係がキーポイントなのである。朝鮮王朝の祭器のなかには、中国の殷周時代の青銅器、たとえば尊（酒瓶）や爵（盃）などの模倣品がある。これらは祭礼に伴って整然と並べられ、たとえば宗廟祭礼の祖先献盃などに使用された。こうした祭器や先の楽器を含む国家祭礼のシステムを、高麗は宋から導入したのである。そして、母体が唐でもなく、南北朝でもなく、宋であるとい

うのには、理由がある。南宋の首都臨安府があった浙江省杭州市の省や市の博物館を見学していると、宋時代に殷周時代の青銅器や玉器を模倣した製品を数多く目にする。宋時代には、「礼楽」に関する多くの復興が視覚的にも行われたことは明白である。唐や統一新羅という旧体制からの移行問題と文化復興を、文物考古学的に検討する重要なテーマといえる。そして、そこに日本の平安時代から鎌倉時代への移行問題と選択カードの違いを重ねてみると、じつに興味深いのである。

(2) 特別展「還収した朝鮮王室の儀軌と図書」

特別展「還収した朝鮮王室の儀軌と図書」が、2011年12月27日から2012年2月5日まで国立古宮博物館で開催された(図14)。これは、日本政府が韓国政府へ2011年10月に朝鮮王朝儀軌81種167冊(宮内省が1917年に購入した1種4冊、および朝鮮総督府に1922年に寄贈された80種163冊)と朝鮮王室のその他の図書69種1,038冊(1908~1909年に伊藤博文氏を持ち出し、死後に宮内省へ寄託された図書中の66種938冊、および朝鮮総督府に寄贈された3種100冊)を返還したことを広く国民に伝えるためのものである。儀軌とは、宮中の祭礼



図14 旧書架を使用した書庫の復原

を図入りで記録したものである。なお、1966年に日韓協約および協定によって、伊藤博文氏を持ち出した図書の一部が返還されている。筆者は2012年2月3日に特別展を見学した。会期末ということもあり、多くの見学者が訪れていた。

筆者が本特別展を見学して強く感じたことがある。日本政府は、韓国政府へ朝鮮王朝儀軌と王室図書を返還する前に、まず日本国民に公開し、それらがどのような内容のもので、韓国の歴史にとってどのような意味をもつものかを説明し、本来韓国にあるべき文物が日本にあるという不情理性への認識に基づき、伊藤博文氏や朝鮮総督府が図書を日本へもち出し、それらが宮内省(現宮内庁)に保管されていた経緯を説明すべきだったと思う。これらの図書の返還は歓迎すべきことであるが、それらが韓国の歴史資料であって、日本には直接関係がないから、返還すればそれでよい、というものではないと考える。

返還後間もなく、韓国KBSテレビが関連番組を放映したが、自由民主党のある議員が、植民地時代に日本へ持ち出し、保管している文化財の問題は、1965年の日韓協約および協定で解決済みで、今回の行為は返還ではなく寄贈だ、と発言した。本稿2-(2)でも述べたように、扶餘郡の百濟・軍守里廢寺跡は、朝鮮総督府によって1935年に発掘調査が行われたが、国立扶餘文化財研究所が史跡整備などの目的で2005年から発掘調査を行った。1935年の発掘で出土した遺物の一部は、いまだ日本に保管されている。韓国側の新たな発掘や研究、報告書の刊行に先だって、それらを返還する手だてはなかったのだろうか。こうした事例はほかにも

あるので、今回の朝鮮王朝儀軌と王室図書の返還を契機に、戦前に海外から持ち帰った文化財の返還問題を相手国からあれこれ指摘される前に、自ら積極的に検討すべきであろう。

おわりに—その他の活動—

韓国研修を機に、韓国語の学習を35年ぶりに再開した。12月中旬までは1日4時間週5日の初級演習を受講し、毎日の予習、復習、宿題、恐怖の単語100問テストはもちろん、中間考査や期末考査までこの錆び付いた頭でクリアした。日々の研究と週末の各地のシンポジウムへの出張もこなしながらの生活は、かなり辛い(カライではない)ものがあり、スカイプで妻に何度も弱音を吐いた。その後は、週2日(各2時間)だけの韓国語学習に切り替えたが、研修の最後まで継続する予定である。国際交流における言語の重要性を身にしみて知る筆者は、韓国語の習得に人一倍執着している。研究成果をあげることはもちろんであるが、それを韓国語で韓国の考古学者に伝えることも、非常に重要なことであると考えている。果たしてあと半年でその夢にどこまで近づけるか、努力あるのみである。

朝鮮大学校博物館主催の蔚山への文化財見学旅行(2010年10月8~9日)では、一般市民約40名とともに韓国の秋を満喫した。蔚山の岩崖画もようやくこの目で見ることができた。『古代都市溟州と岬山寺』のシンポジウムでは、金聖範所長から有名な金鴻植氏(明知大学校建築学教授)を紹介され、シンポジウム後に氏の幼なじみ3名とともに江陵周辺の名刹・洛山寺などをご案内いただいた。夜の懇親の席で各位と名刺を交換すると、皆さん全南大学校名誉

教授、弁護士、貿易会社社長という名士ばかりで、「自分たちは光州市の出身で、小学校から高校までの親友である。年に2回各地を旅行する。」ということを知った。筆者が、「仙台市と光州市は姉妹都市で、わたしの出身校の仙台一高は光州一高と交流校である。」という、「自分たちは光州一高の出身」ということで一気に盛り上がり、マッカリ15本を開けてしまった。

2011年11月24日には、全北大学校の教授になった金洛中氏(2009年に本専攻が招聘)の依頼を受けて、『東アジア古代寺院の木塔と舍利奉安』と題する講演を行った。

遺跡見学や資料調査はもっとも楽しく、いつも集中してしまう。李起吉氏には9月25日に竹内里遺跡を、11月3日に発掘中の下加遺跡の現場をご案内頂いた。また、2012年1月18日にはソウルの慶熙大学校博物館(成チュンテク教授)で全谷里遺跡の、2月22~23日には清州市の韓国先史文化研究院(李隆助理事長・忠北大学校名誉教授)で坡州市ウンジョンI地区の前期旧石器の資料調査にお誘いいただいた(図15)。また、韓国旧石器界の重鎮の李隆助氏は忠北大学校博物館まで筆者を案内され、氏が発掘した旧石器資料について丁寧に説明して下さった(図16)。氏と知り合いになって早23年。ようやく韓国語で少し話ができるようになった。

なお、在外研修の目的と関連して、2011年11月26~12月1日には「アジア旧石器協会第4回大会および国際シンポジウム」(東京・国立科学博物館)に、2012年2月11~12日には「第12回古代瓦研究会」(奈良文化財研究所)に参加した。

さて、末筆であるが、研究や食事を含む日常



図 15 韓国先史文化研究院で李起吉氏とともに



図 16 忠北大学校博物館で李隆助氏とともに

生活について、日々気配りをし、支えて頂いている朝鮮大学校の李起吉氏と奥様に対し、衷心より感謝申し上げたい。また、日々身近でお世話になっている朝鮮大学校博物館の李康熙、金恩正、金秀雅、鄭又誠の各女史にも、あと半年間よろしくお願い申し上げたい。さらに、諸処ご負担をおかけしている本専攻主任の政岡伸洋氏および本学歴史学科科長の渡辺昭一氏をはじめとする教員各位、とくに辻秀人氏に厚くお礼申し上げたい。

参考文献

- 禹誠勲 2011「高麗時代首都開城の都市状況と京中支配の変化」『文化財庁 50 周年記念国際シンポジウム 古代首都開城と東アジアの都城文化』（発表要旨集）、国立文化財研究所考古研究室
- 韓国瓦学会 2011『第 8 回定期学術大会：瓦の生産と流通』（発表要旨集）、韓国瓦学会
- 金 洛中 2009『榮山江流域の古墳研究』韓国・学研文化社
- 金 洛中 2011「韓半島前方後円形古墳の研究現況と課題－被葬者の性格を中心として－」『考古学発掘と研究、50 年の省察（深堂趙由典博士古希記念論叢）』韓国・ジュリュソン出版社
- 国立古宮博物館 2005『国立古宮博物館』（開館図録）、韓国・国立古宮博物館
- 佐川正敏 2010「飛鳥寺木塔心礎考」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざままで－』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 佐川正敏 2011a「中国と韓国の 13～3 万年前の人類文化の概要と研究課題」『宮城考古学』第 13 号、宮城県考古学会
- 佐川正敏 2011b「南北朝時代から明時代までの造瓦技の変遷と変革」『古代』第 129、130 合併号、『古代』編集委員会
- 辻 秀人 2007「榮山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳」『東北学院大学論集 歴史と文化』第 42 号、東北学院大学学術委員会
- 田 庸昊 2011「益山王宮里遺跡の寺院についての一研究－寺院関連遺構についての争点を中心として－」『考古学発掘と研究、50 年の省察（深堂趙由典博士古希記念論叢）』韓国・ジュリュソン出版社
- 独立行政法人国立文化財研究機構奈良文化財研究所 2010『古代東アジアの造瓦技術』（奈良文化財研究所研究報告第 3 冊）
- 菱田哲郎 2005「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』第 52 巻第 3 号、考古学研究会
- 李起吉・崔ミノ・金恩正 2000『順天竹内里遺跡』朝鮮大学校博物館・順天市庁・益山地方国道管理庁
- 李起吉・金秀雅 2009『順天月坪遺跡－第 3 卷：2005 年 3 次発掘－』朝鮮大学校博物館